

ケースでわかる! 精神科治療ガイドラインのトリセツ

EGUIDE プロジェクト ● 編

B5・頁138

定価:4,400円(本体4,000円+税10%) 医学書院
ISBN978-4-260-04292-5

評者 尾崎 紀夫

名大大学院教授・精神医学/親と子どもの心療学

書評執筆も回数を重ねてきたが、今回の執筆依頼は、評者自身がかかわった「うつ病治療ガイドライン」(に加えて「統合失調症薬物治療ガイドライン」)の研修プログラム(EGUIDE プロジェクト講習会)をもとにした書籍であり、「直接関係のない書籍の書評とは勝手が違うのではないか」と思っていた。しかし本書を読み、ガイドラインを踏まえてはいるが、著者たちの創意工夫に溢れたオリジナルな書籍であることを実感した。

「うつ病治療ガイドライン」は「最新のエビデンスを盛り込む」が、「診断基準に含まれる患者群は極めて多様であり、『抑うつエピソード』に基づいた確認が終了した段階で治療方針を立てることは困難」である点を踏まえ、「うつ病治療を始めるにあたっては、詳しい診断面接(検査含む)により、患者さんの診立てを行い、初診から治療終了までの全体を見通して、大まかに治療計画を立てることが必要」との基本方針のもと、発表した。とはいえ、具体的な症例は提示されておらず、使い方は読者任せである。一方、本書は、例えば中等症のうつ病寛解状態にある挙児希望の患者を挙げ、ガイドラインを生かした治療方針の立て方、さらにガイドラインでは不足するエビデンスの補足、何より相対する患者および家族にどのような情報を共有し、いかに対応するのか、すなわち Shared decision making の在り方を記載している。

また「統合失調症薬物治療ガイドライン」は薬物治療に特化した内容であり、「うつ病治療ガイドライン」で重視している「治療計画の策定」に当たる部分や心理社会的治療に関する記載

には乏しいきらいがある。しかし本書には、主治医交代を機に、就労を希望する統合失調症患者を例にとり、「詳しい診断面接(検査含む)により、患者の診立てを行い」「(心理社会的な側面を含む)治療計画」をどのように立てたかが、面接場面とともに描写されている。

ガイドラインでは果たすことができなかった、かゆいところに手が届く、書籍である。

最後に、本書というより、EGUIDE プロジェクトへの期待を込めたお願いをしておきたい。心理教育がアドヒアランス向上の効果を

上げるためには、『自分の力で救ってやろう』とする医師と『ひたすら受身的な患者』という望ましくない治療モデルを避け、患者が「実際に行動を修正し、新しい対処や問題解決技術を学ぶ助けとなる」ことが不可欠[秋山剛, 尾崎紀夫(監訳): 双極性障害の心理教育マニュアル. 医学書院, 2012]である。この点は、既に本プロジェクトにおいて具現化されているように、本書から感じる。

加えて、認知リハビリテーションにおいて「認知課題セッション」で得られた方法が、就労につながるためには、実生活の場面について検討する「言語セッション」が必須である。さらに「サポートつき雇用」を併用することにより、一層の機能改善が得られる(Annu Rev Clin Psychol. 2013 [PMID: 23330939])。以上を踏まえると、若手精神科医(専攻医)が実際に遭遇した症例を提示し、検討するセッションをEGUIDE プロジェクトに加えていただくと、一層教育効果が上がるのではないかと思う。関係者の方々には今後の課題としていただければ幸いである。

ガイドラインでは届かない “かゆいところ”に手の届く書籍

